

平成28年度 県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会

議事概要

1 日 時 平成28年7月20日（水） 13:00～16:45

2 場 所 奈良県議会棟 本会議場及び第2委員会室

3 出席者

荒井正吾委員長、栗山道義副委員長、岡本好央委員、音田昌子委員、佐藤滋委員、辻井利典委員、辻本俊秀委員、中野聖子委員、高橋真知委員、吉本清信委員

・県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会規則第5条の2の規定により、会議の開催が成立したものとする。

（第5条の2 委員会は、委員（委員長を含む。）の過半数の出席がなければ、会議を開き、議決をすることができない。）

4 公開・非公開の別

・プレゼンテーション及び質疑応答 公開（傍聴者 77人）

・審査及び選考 非公開

非公開理由：県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領第3条の規定による

（第3条 委員会は原則公開とする。ただし、審査及び選考については、奈良県情報公開条例（平成13年3月奈良県条例第38号）第7条第2号に該当する情報について審議等を行うため、非公開とする。）

5 概 要

<開会>

○知事挨拶

- ・今年度で4回目の開催となる「県内大学生が創る奈良の未来事業」公開コンペに、本日は多数ご参加いただき、感謝申し上げます。
- ・県という行政組織の意思決定は、議場で行われる。よって、議会が政治意思の決定権者ということになるが、その内容を決めるのは理事者側である。「県内大学生が創る奈良の未来事業」公開コンペは、政治意思を決定する模擬演習のようなもの。本日は、公開コンペを通して政治参加の仕組みを体験していただきたい。
- ・地域が良くなるようにするためにはどのようにすればよいか、大学生の皆様には知恵を絞り、発表していただきたい。発表していただくことにより、周囲の方々や行政にとっても、大いに参考になる。
- ・このような試みを理解していただき、本事業が定着してきていることを大変有り難く、また、嬉しく思う。審査に参加していただく審査委員の皆様には心から感謝申し上げます。本日は皆様よろしくお願ひ申し上げます。

<プレゼンテーション及び質疑応答>

○県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領第2条の規定により、県内大学生が創る奈良の未来事業に応募した県内の大学等に在籍する学生（以下「県内大学生」という。）によるプレゼンテーション及び委員による質疑に対する県内大学生からの応答を行った。

(1) 政策提案1

政策提案の名称：「ミナライ が生む つながり」

提案者の在籍する大学等の名称：畿央大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

健康科学部人間環境デザイン学科4回生 野田 眞之介

○資料1に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（岡本委員）：

- ・御所市でやっておられるコミュニティカフェは高齢者が中心ということであるが、若者の目から見て、高齢者がやるうえで困ることがあれば、代表的なものを挙げていただきたい。また、高齢者の方をどのように住民参加につなげていっているのか教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・コミュニティカフェでは歌声喫茶等も行っているが、音楽器具の操作をわかっておられない方が多い。また、フローリングの板張り等も、高齢者の手だけでは行うことができないので、私たち学生が入ることによって、若者の力を活用している。また、コミュニティカフェを行っている高齢者の方にアンケート調査を行ったところ、学生と交流ができたという回答が1番多かった。私たちも御所市のコミュニティカフェに参加したが、若者が参加しているということについて、高齢者の方はとても喜びを感じておられた。このように、若者との交流を大事にしてくださる高齢者の方もおられる。

○質疑（音田委員）：

- ・問題点で女性の就業率の低さを取り上げられており、女性の就業につなげるということであったが、それは女性が企画の講師になったり、コミュニティカフェのお手伝いをしてくれるスタッフになったりすることで、報酬が発生するということか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・子育て期の方で、子どもと一緒になら、地域活性化のプロジェクトに参加してもよいと言う方が多くおられると思う。就労したくても、就労できない方もおられると思うので、そういった方々を対象として、子どもと一緒に地域活性化のために企画に参加していただけるよう、提案させていただいた。

○質疑（音田委員）：

- ・このような事業は、各市町村等それぞれの自治体と連携していくという形が多いと思うが、県が入ることによってどのような意味があるか。県とミナライとの関係、それから市町村とミナライとの関係について、どのように考えているのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今の段階では、御所市のコミュニティカフェでは、御所市役所の方々に協力

していただいて、スタッフ会議等も開いているが、奈良県全体がつながるといことが私たちの提案であるので、県が入っていただくことで、奈良県全体にこのプロジェクトを広めていきたい。

○質疑(辻本委員)：

- ・コミュニティカフェが増えてきたとき、どのような運営形態にするのか。組織体制という観点にたって、どのような方向性で進めていくのか教えていただきたい。

応答(県内大学生グループ)：

- ・現在は、御所市のコミュニティカフェに参加されている高齢者の方、御所市の職員の方、そして私たちでスタッフ会議を開いている。その会議で、問題点の抽出等を行い、最善の解決策を提案して、第2のモデルとして、設置していきたいと思う。

(2) 政策提案2

政策提案の名称：「心もバリアフリーに！ 誰もが楽しめるアダプテッド・スポーツ」

提案者の在籍する大学等の名称：天理大学・奈良教育大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

天理大学人間学部人間関係学科生涯教育専攻3回生 春名 誠

○資料2に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○意見(吉本委員)：

- ・心のバリアフリーということで非常に斬新的なアイデアであるが、分析結果として、健康寿命が短いと発表されたところが少し気になったので、もう少し調べていただきたらと思う。

○質疑(岡本委員)：

- ・アダプテッド・スポーツの最大の問題点は、障害者や高齢者を指導する指導員の不足だと言われている。この提案では、大学生をボランティアの指導者として育成していくということであるが、具体的にどのように育成しているのか、あるいは今その途上であれば、どのように育成していこうとしているのか。

応答(県内大学生グループ)：

- ・ボランティアの育成に関して、現在、天理大学のOBがホイールチェアフットボールの普及に取り組んでおり、私自身もホイールチェアフットボール活動のお手伝い等も行っている。そういった形で、指導者を育成していきたいと思っている。

○質疑(岡本委員)：

- ・広がりを持たせるためにはどのようにしたらよいと思うか。

応答(県内大学生グループ)：

- ・ホイールチェアフットボールについては、今は部活内で行っているだけであるので、興味のある学生等にも呼び掛けて、参加を進めていこうと考えている。

○質疑(辻井委員)：

- ・非常におもしろい取組だと思うが、アダプテッド・スポーツの日本での成功

事例または世界での成功事例について教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・宇陀市で開催された「うたのウォーク」や「奥大和ゆうゆう祭」でホイールチェアフットボールの体験等も行っている。このように、宇陀市が前向きにアダプテッド・スポーツフェスの開催に力を入れておられることが、1つの成功であると思う。

○質疑（栗山副委員長）：

- ・障害者のみならず、健常者、特に体力の衰えてきた高齢者の方々を、体を動かす方向へ導いていこうということは、大変良い方向性だと思うが、その場合に、体力の衰えた健常者が参加しやすい、おもしろそうな取組はないか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今回はニューアダプテッド・スポーツをつくろうということで、車椅子を使うということを前提に考えている。すると、歩ける人も歩けない人も参加ができるので、1つの新規性として考えている。

(3) 政策提案3

政策提案の名称：「農地の窓口」

提案者の在籍する大学等の名称：近畿大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

農学部農業生産科学科3年 中井 隆教

○資料3に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（吉本委員）：

- ・着眼点は非常におもしろいが、具体的にどのように評価されるのか、教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・期待される評価プラス、このモデルは奈良県だけでなく、全国でも活用して使えると思うので、全国的に使えるようにしていきたい。

○質疑（栗山副委員長）：

- ・今回の提案でおもしろいところは、五條市と平群町で狙いの置きどころをかえて、地域の特性をみてやっていこうとされているところである。各地域で誰が取りまとめているのかわからないという問題があるが、窓口を設置すると便利である。経験による指導は、現地で農業をしている人に教えていただけだが、理論的に、短期間で農業について学べるということが、非常におもしろい提案だと思う。窓口というのは、どのような人たちで、どのような場に設置にされるのか、具体的な考えがあれば教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まず、農業大学校にブースを設置すると考えたのは、農業大学校が県による運営なので、ブースを設置しやすいと考えたからである。農業をしたいと思う人が多いその他の場所にもブースを設置していき、耕作放棄地や様々なところで農地を再生していきたいと考えている。また、耕作放棄地だけではなく、何年後かに耕作放棄地になる可能性のある農地もプラスして農地選びができるようにしていきたい。耕作放棄地の再生は、最近国が力を入れており、交付金がとても手厚くなっているため、それを農地に適した形で利用できる

よう、ブースを設置していきたいと考えている。

○意見（栗山副委員長）

- ・窓口を平群町の役場や公民館等、すぐに人が相談しやすいように設置し、役場とも組んでやっていくということを考えて非常によいと思う。

○質疑（音田委員）

- ・大変よい試みであり、個性的なすばらしい提案である。達成目標として、5年後に耕作放棄地を100ヘクタール再生する、60代の新規参入者を50人増やす等、具体的な数字を挙げているが、そういう目処があるのか。また、リーディング品目とチャレンジ品目の生産を増やすということであるが、それぞれについて何か具体的に考えているか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・実習として平群町で農業を行い、大和野菜を作っているが、まだまだ知名度が低いということが挙げられるので、今後もっと広げていきたい。奈良県の農業は、北海道や東北、新潟等のように、大規模で集約的に行うのではなく、小面積で耕作価値の高い品目だけを育て、それをブランド化していくというスタイルであるが、奈良県の農業をどんどん広げていくためには、リーディング品目である柿やお茶だけではなく、チャレンジ品目である大和野菜等も広げていく必要があると思う。また、数値目標については、平群町と五條市の耕作放棄地の面積を足して、50代～60代の就農者の方が無理なく農業を続けていける50人で割った数が適当だと思い、設定した。

（4）政策提案4

政策提案の名称：「大学生が創る子どものための「スポーツ三間」」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良教育大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

教育学部保健体育専修3学年 丹後 直哉

○資料4に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（辻井委員）：

- ・今回取り上げた内容は、まずは大学の空間を使って始めていくということだが、この企画を一度行ったあと、どのように取組を拡大していくのか。具体的な内容や最終目標があれば教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まずは奈良教育大学で企画をし、今回このモデルが事業化されることになり成功すれば、広報を通じて広め、他の大学や、高校、中学校、小学校の空いている体育施設を活用できるようお願いしたいと考えている。また、最終目標については、事業に参加していただいた児童や保護者の方に、「満足した」「楽しかった」等の項目を含むアンケートをお配りし、どのような感想を持たれたかを参考に、設定したいと考えている。

○質疑（佐藤委員）：

- ・子どもたちが自らいろいろ考えて行動したり、活動をつくりあげたりするという余地はなくてもよいのか。

応答（県内大学生グループ）

- ・今回はまだ児童の主体性を活かすというところまでは考えておらず、まず

は空間、時間、仲間に重点をおき、大学で空間を提供し、そこにプログラムをつくることで時間というものを提供し、集まった児童たちの間で仲間づくりが広まればよいと考えている。

○質疑（辻本委員）：

- ・三間を増やして県内で広げていこうとした時に、スタッフの数を増やしていく必要があると思うが、今後の方向性についてどのように考えておられるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まずは保健体育や幼児教育を担当している学生をスタッフとして考えている。今回事業化することになり、成功すれば、その結果を広報を通じて各大学等に広め、人員を確保していこうと考えている。

(5) 政策提案5

政策提案の名称：「女子大学生のためのキャリア形成プロジェクト」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科博士前期課程生活文化学専攻1年 岸本 真実

○資料5に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（中野委員）：

- ・性別による固定的役割分業意識の解消を目指すということであるが、実社会においては、すでに固定的役割分業意識を持ち、社会を構成している男性、女性がたくさんおられる。それについては、どのように打開していこうと考えておられるか。また、就業を中心にお話されていたが、起業家精神の育成等についても考えがあれば、お聞かせいただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・まずは、実際に就職活動をしている女子大学生を対象に固定的役割分業意識解消のための講座を実施し、将来的には男子大学生向けにも展開していこうと考えている。講座を受けた世代の年代が上がり、企業の管理職等になった時に、下の世代も固定的役割分業意識を解消した社会ができると期待している。また、起業家精神を持った方もおられるというご指摘があったが、人数として就職することを希望している女子大学生の方が多いので、まずは就職することを目標にしている女子大学生を対象に講座を展開していく。もし、起業を希望するという声があれば、そういう方のための講座も展開していくという形になればよいと考えている。

○質疑（高橋委員）：

- ・奈良県のみならず、関西全体から、優秀な人がどんどん東京に行ってしまうという現状もあるので、奈良県を中心にこのような事業が始まることによって、関西全体にこういった動きが出てくるとよい。質問であるが、ゲストスピーカーについては、実際に就職され、ワークライフバランスを実現されている皆様の年齢に近いような方を考えているのか、それとももっと強い志を抱かせるような考えを発表していただけるような方を考えているのか、何かアイデアがあれば教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）

- ・基本的には、仕事と家庭を両立して、ワークライフバランスを実現しておられる方を想定している。

○質疑（辻本委員）：

- ・短期目標として、この事業の講座やインターンシップを修了した学生の奈良県内就職率について、事業に参加していない学生の2倍にすることと設定されているが、奈良女子大学や県立大学、奈良工業高等専門学校で取り組んでいるCOC+（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）の取組と基本的にマッチングしている。大学側とは、今回の提案について、どのような形でお話をされているのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・私たちは、女性の活躍について勉強する学科に所属しており、仕事を続けて将来管理職になってほしいというような指導を4年間受けてきたので、大学側もそのように考えていると思う。

○意見（音田委員）：

- ・私たちが若い頃にこのような講座があればよかったと思いながら聞いていた。ライフデザイン基礎講座については、県の女性センター等でも実施しているかと思うが、県内企業でのインターンシップやファイナンシャル・プランニング講座と一体的に実施するという試みは、キャリアプランを考える上で非常に重要だと思うので、大変すばらしい。インターンシップ受け入れ先の県内企業について、発表の中で例として挙がっていた企業以外にも、女性の活躍に力を入れている企業もあるので、できるだけ多くの企業の協力を得られるような形で進められるとよい。

（6）政策提案6

政策提案の名称：「S i g h t F e e l i n g N A R A 感じてみつけ！
あなたの奈良 魅力再発見プロジェクト」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科住環境学専攻1年 金村 麗華

○資料6に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（佐藤委員）：

- ・魅力を感覚によって表現するということであるが、それらの魅力を具体的に学生がどのように発見するのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・私たちだけで感覚によって表現することのできる魅力を見つけ出すことは不可能であるので、本事業では、視覚や聴覚障害者等の方々に協力いただくことによって、一緒に見つけ出していく。例えば、昨年度、視覚障害者の方と奈良の観光について調査を行った際に、私が東大寺の大仏について、大きい、すごいという漠然とした印象を持ったのに対し、視覚障害者の方は、大仏殿はとてもひんやりしていた、また大仏殿の柱を触ってみると、ちょっとざらざらしていたといった、より体感的な感想を持たれた。つまり、私たちと視覚、聴覚障害者等の観光では、観光の質に違いがあるのではないかと着目し、今回この政策提案を行った。

○質疑（高橋委員）：

- ・大変おもしろい提案である。感覚による観光の魅力を抽出する方法については、私たちとは違う感覚をもって観光をされている方々にご協力をいただくということであったが、マップ等の制作物にその情報を落とし込んでいく際には、誰をターゲットにつくるのか。視覚や聴覚障害を持っておられる方向けなのか、一般の方をターゲットにして、異なった感覚を理解してもらうことを目的としているのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・ターゲットについては、ユニバーサルデザイン的なアイデアであるので、最終目標はすべての人が対象ということになるが、足がかりとして今からきっかけとするのは、このような観光をしたことのない私たちと同年代の方を考えている。他には、現在このような感覚を使ったアート等が普及されてきており、そういった方々に訴えかけることによって、より広がりを見せられるのではないかと考えている。また、こういった感覚を使うということによって、外国人や子どもにもよりわかりやすい情報提供ができると考えている。例えば修学旅行の際に、このプログラムを使用していただいたり、外国人が来られた際に、限られた文字情報だけではなく、このようなマップ等も一緒に渡すことによって、新しい観光の提案ができるのではないかと考えている。

○質疑（辻井委員）

- ・フィーリングで観光するという一方で、非常に面白い提案だと思うが、マップ以外で何か考えている取組があれば教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今回の政策提案では、マップとそれに附随する紙媒体とを提案させていただいたが、情報をマップに落とし込んでいくだけでは、広がりは見られないと私も感じている。そのためにマップに附随したアトラクションを行うことが必要だと考えており、例えばイベントを企画したり、スタンプラリー形式にしたり、ゲーム性をもたせることによって新たな展開が生み出せると考えている。

○質疑（栗山副委員長）：

- ・観光（S i g h t s e e i n g）では、体験型観光や、参加型観光、例えば写経をしたり、鹿にせんべいをやったり、大仏さんの柱の穴をくぐったり、そのような形で自由に広がりをもつことができるが、F e e l i n gという場合は、その場でぐっと集中する等設定がないと、なかなか入り込めない。そこで、携帯をそこにかざせば、ここではこの線香のにおいがすると教えてくれる等、工夫して考えられるのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今言われたことはまさにそのとおりで、アプリケーションであれば、ただ情報を発信するだけではなく、もっと相手側が受け取りやすいように、様々な情報提供ができるのではないかと考え、アプリケーションという媒体を用いることにした。例えば、東大寺に近づき、そこでアプリケーションを開いたら、そこに情報が入ってくるというような仕組みをつくる等、広がりをみせるということも本提案の本質にはある。

(7) 政策提案7

政策提案の名称：「女子大塾 ～女子大生による県南部学習支援～」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

生活環境学部住環境学科4回生 小澤 初葵

○資料7に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（岡本委員）：

- ・現在、IT技術が随分発達しているが、教えていることを全国に発信するということは考えているか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・女子大塾の目的は、子どもの学習機会の不平等を解決するというだけではなく、奈良県の南部地域では、若い子どもが高校生や大学生等の身近な子どもと接する機会が少ないという現状がある。そこで、私たち大学生はその村におられる大人よりも身近な子どもであるので、私たちが実際に村に行つて、勉強だけではなくレクリエーション等も行い、子どもたちと交流を深めることにより、彼らが近い将来、高校生、大学生となる上で、未来を思い描くきっかけになると考えている。実際に会い、交流していくということが大切であると考えている。

○質疑（佐藤委員）

- ・この事業を行うことにより、大学生にどのようなメリットがあるのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・私たち大学生の中には、教職に就くことを考えている者もあり、実際に小・中学生等に勉強を教える機会が得られることはプラスになると考えている。それと同時に、教職に就くことを考えていない大学生にとっても、実際に南部地域に滞在してその地域の現状を学ぶことにより、南部地域への理解も深まり、それが奈良県に就職することにつながるのではないかと思う。

○質疑（辻本委員）：

- ・今後の課題として、女子大塾を運営していくうえでの財政的な自立を挙げておられるが、どのような方法で自立をしていくのか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・今の段階では、保護者の負担やその地域の自治体の負担等を考えている。

(8) 政策提案8

政策提案の名称：「奈良は和食発祥の地！和食を守ろう。」

提案者の在籍する大学等の名称：帝塚山大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

現代生活学部食物栄養学科3回生 小笠原 綾音

○資料8に基づき、県内大学生グループよりプレゼンテーション

○質疑（佐藤委員）：

- ・奈良県内で食の洋食化が進んでいるということだが、どのようなデータを参考にしたのか教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・平成25年度、27年度総務省統計局家計調査において、牛肉の消費量全国3位、バターの消費量全国3位、パンの消費量全国4位ということに注目し、和食よりも洋食化が進んでいると考えた。

質疑（辻本委員）：

- ・お弁当の販売について、駅ナカを活用するという話があったが、通勤途中の人は急いでいるので、なかなか買いには来ない。もし販売するのであれば、企業に直接行く必要があると感じたが、それについてはどのように考えておられるか。

応答（県内大学生グループ）：

- ・駅ナカでの販売と考えていたが、ご意見を参考にして、お弁当の販売をお弁当販売店に任せたいと思っている。また、お昼に買いに行ける時間帯に、買いに行きやすい場所で販売したいと考えている。

質疑（辻井委員）：

- ・大変おもしろい提案だが、奈良の郷土料理、伝統食で思いつくものがあまりない。今回の提案の中で、奈良の特産物の発掘やブランド化について、考えているものがあれば教えていただきたい。

応答（県内大学生グループ）：

- ・奈良の特産品、伝統料理として、代表的に茶がゆや柿の葉寿司が知られているが、それを知らない人もいると思うので、それらについて広げ、皆に知っていただきたいと考えている。

<審査・選考>

- 「県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会運営要領」第2条の規定により、委員による審査及び選考を実施し、最優秀賞1提案、優秀賞2提案を選考した。

- ・最優秀賞：

政策提案3

政策提案の名称：「農地の窓口」

提案者の在籍する大学等の名称：近畿大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

農学部農業生産科学科3年 中井 隆教

- ・優秀賞：

政策提案6

政策提案の名称：「S i g h t F e e l i n g N A R A

感じてみつけ！ あなたの奈良 魅力再発見プロジェクト」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学

グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：

大学院人間文化研究科住環境学専攻1年 金村 麗華

政策提案7

政策提案の名称：「女子大塾 ～女子大生による県南部学習支援～」

提案者の在籍する大学等の名称：奈良女子大学
グループ代表者の学部・学科・学年・氏名：
生活環境学部住環境学科4回生 小澤 初葵

○最優秀賞、優秀賞以外の提案についても、事業化の検討を行うことを、県内大学生が創る奈良の未来事業審査委員会で決定した。

<選考結果発表・表彰>

○荒井委員長より、最優秀賞1提案、優秀賞2提案を発表し、賞状と副賞を授与した。

<審査委員長講評>

○荒井委員長より、講評を行った。

- ・8つのグループ全てが大変優秀で、点数は僅差であった。
- ・通常であれば、最優秀賞、優秀賞の政策提案のみについて事業化に向けた検討を行うが、その他の提案についても、素晴らしいアイデアであるので、今後形は変わっても実現できるよう、事業化の検討をさせていただくことを、審査委員会で決定した。
- ・本日はご参加いただいた審査委員の皆様、大学生の皆様に感謝申し上げます。奈良県が少しでも良くなるよう、アイデアを実現させていただきたい。また、来年もよろしく願い申し上げます。

<閉会>